学位論文審査の結果要旨

博士論文提出者	D18501　　安達　寛人
博士論文審査委員	主査　職・氏名　　教授　　石田　和子 副査　職・氏名　　教授　　常盤　洋子 副査　職・氏名　　教授　　谷本　千恵 副査　職　氏名　　教授　　小泉美佐子

Ⅰ　博士論文本審査結果の要旨

学籍番号 D18501 安達寛人から提出された博士論文「うつ病をもつ人における自殺再企図の経験」について、令和 5 年 1 月 17 日 14 時から 15 時に博士論文本審査を行った。

（1）博士論文の概要と評価

本研究の目的はうつ病をもつ人における自殺再企図の経験について明らかにし、自殺再企図を予防するための看護の示唆を得ることである。研究方法はうつ病または抑うつエピソードをもつ双極性障害と診断されて外来受診を継続しており、自殺企図を 2 回以上繰り返した人を条件として、自殺企図の経験について半構成的面接で語ってもらいデータとした。分析は、Giorgi の科学的現象学的アプローチをもとに行った。対象者は 5 名であり、平均年齢は 44.6 歳、自殺企図回数は 2～5 回であった。対象者は職場や家庭におけるネガティブなライフイベントが続いたことでうつ病を発症していた。サポート不足のまま抑うつ状態を強めていき、心理的な苦痛の蓄積によって【制御を超えた閉鎖的状況の持続によって自殺に追い込まれ】ていた。死ぬことが解決方法であると考えた状態で引き金となる精神的な揺さぶりがあり、苦痛からの解放願望を伴った死への欲動と死を推測できる手段や状況が合致したことで【つらい現実からの解放を求めた衝撃的な自殺行動】を起こしていた。冷静な状況では死への恐怖を有していたが、自殺を決意した後は【死への欲動に駆られた自殺行動への突進】に至り、途中思いとどまることなく死に向かって行動していた。死への欲動に駆られて自殺を試みてはいたが、迷いや現世への心残りを有しており【確実な死の決行に対する意識・無意識の撤退】をしていた。結果、自殺未遂に終わる一連の経験が繰り返されていた。考察は結果を通して、自殺予防支援として自殺企図という現象をありのまま当事者の視点で理解しようとする態度を持ち、当事者のつらい気持ちや自殺行動に関する心境等の経験を聴くことで精神的な苦痛の焦点を捉えるよう努めること、そして個々の生活状況や認識に合わせたケース・マネジメントを実施していくことの重要性について言及していた。本論文は自殺再企図の患者の当事者から得られたデータを分析した研究であり、精神看護学領域の自殺企図患者への看護の質向上につながる研究であると評価された。

（2）審査経過

審査は研究者のプレゼンテーションおよび口頭試問にて行われた。研究論文は予備審査をもとに更なる完成度を高めており、本論文の研究成果は、自殺再企図という極めて貴重なデータを現象学的に詳細かつ丁寧に分析された研究であり研究者の粘り強い努力の賜物であると評価した。

（３）審査結果

博士後期課程論文審査基準により「研究題目」「論文の意義」「論文の内容」「倫理的配慮」について審査を行い、充分に博士論文としての条件を満たしていることを確認した。

Ⅱ　最終試験結果の要旨

以下の項目について試問し、満足すべき回答を得た。

1. 本研究における理論的な枠組みを踏まえたことについて
2. 本研究の妥当性について
3. 本研究の結果をどう生かすかについて

以上により、学位論文提出者：安達寛人に博士（看護学）の学位を授与することが「適当」であると認定した。